

トップ対談

世界トップレベルの知識と技術で業界をリード

～シェイプアップハウス～

シェイプアップハウスは世界トップレベルの知識と技術、マナーを心がけ、ユーザーの体と心を美しく磨き上げるエステティックサロンを運営している。理論に基づいた技術の開発や、徹底した教育研修、ISOの店舗ごとの導入など常に業界をリードしてきた。エステティシャン教育のための専門学校やNPO法人の設立など、業界の地位向上のために幅広く活動している。今年1月には、それら取り組みと事業発展の功績が評価され、同社の下村朱美社長は日刊工業新聞社主催の優秀経営者顕彰・女性経営者賞を受賞した。事業にける思いや今年から始まる海外進出について、下村社長と千野俊猛日刊工業新聞社社長が語り合った。



株式会社シェイプアップハウス 社長 下村 朱美氏

起業から27年 優秀経営者顕彰受賞

千野 このたびは受賞おめでとうございます。おめでとうございます。ありがとうございます。モノづくりの新聞の賞です。とても光栄に思います。

下村 ありがとうございます。モノづくりの新聞の賞です。とても光栄に思います。ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。

千野 後日開催された受賞祝賀会では、下村さんの人脈の広さに驚かされました。

下村 全国から幅広い業界の方に参加して頂いて、本当に感謝しています。祝賀会にはスバリ・タンディハウス新宿本店で開催しました。このような店舗を経営して頂いた賞です。皆さんに知ってもらいたくて、実際のサロンを見て頂きました。女性はエステを経験されている方が多いですが、男性はまだ恥ずかしいですね。千野さんもぜひ一度いらして頂きたいです。

千野 ありがとうございます。女性経営者賞での受賞でしたが、自分が女性経営者だと意識したことはありませんか。

下村 若い頃は意識しました。女性であることが嫌で、早く歳をとりたいと思っていました。23歳で化粧品販売代理店を、25歳でエステティックサロン経営を始めましたが、銀行でも、保証協会でも話をするたびに悔しい思いをしました。悔しいと涙が出るのですが、それがまた悔しい。男は外に出たら人の敵がいると言いますが、女は17人いると思っていました。

千野 その意識はいつ変わりましたか。

下村 30歳で結婚した時ですね。これで私は守られるのだと、ほっとしました。当時、当社の社員は全員女性でした。夫(下村マルコ副社長)が入社してから男性社員も増え、会社も変わっていききました。女性経営者は、特に未婚の方は、色々なところで無理をされているでしょう。

千野 日本には女性の起業家が少ないですね。

下村 もっと若い女性が沢山起業して欲しいです。男性と女性にはそれぞれ長所があります。男性は不器用ですが、一人前になる

成長拡大と安定 両輪で進める経営戦略

千野 会社をおこしてから、もう27年経ちました。

下村 たたまたま面白いはかりで、あっといふ間に、毎年前年比20%の成長を続け、売上高は約8億円、社員数は900人になりました。経営するエステティックサロンは国内134店、業界初のISO9001を取得し、エステティシャン教育のための学校法人を設立しました。また2004年にはエステティシャンの地位向上を目指しNPO法人ワンエンステティック協会を立ち上げました。

わが社は成長拡大と安定、この二つを両輪で進める経営戦略をとっています。成長拡大とは、お客様、店舗、売上高を増やすこと。安定とは、お客様が当社を繰り返し利用し、商品を使い続けて下さること。考えるのはこの二つだけでいい。しかし、最近成長拡大が難しくなっていると感じます。景気後退の影響で、お客様一人当たりの利用額は減少しています。店舗設備で勝負するのではなく、お客様がまた来たいと思うようなサービスをしなければならぬ。新規のお客様も増やさないといけない。少し頭を使った経営をしなければ、初めから考えるようになりません。今までは拡大路線でしたが、30周年を目前に、これからは「守る」ことを考えていかねばならないと思います。

千野 下村さんがエステティックサロンを始めたきっかけは何ですか。

下村 大阪で化粧品販売代理店を経営していた頃、よくエステティックサロンを利用していました。私はエステティシャンたちが大好きでした。若い人たちがお客様のためにこんなに一生懸命になれる仕事は他にありません。でも彼女たちは、なぜこのマッサージをするのか、なぜこの化粧品を使うのかといった理論がありませんでした。彼女たちが理論を学んで自在にお客様をきれいにできたら、もっと幸せだろう。そこで理論がわかるエステティックサロンをオープンしたのです。

千野 学校を設けたのも同じ理由ですか。

下村 そうです。教育は本業に重要ですね。職業意識が、誇りを持ってやるようになり。現在、専門学校の「ミスバリエステティック専門学校」が大阪と名古屋にあり、来春には東京にも「ミスバリエステティック専門学校」(2010年4月開校予定 認可申請中)が開校します。各種学校の「ミスバリエステティックスクール」も全国に6カ所あり、こちらも順次専門学校化する予定です。300時間から3000時間までの授業コースがあります。2000時間勉強したエステティシャンは接客も技術も高級ホテルクラスです。他社では学校形式でエステティシャンを育成しているところはありません。現在エステティシャンに資格制度はありませんから、人手不足もあって、素人同然の人も働いています。でもそんなエステティシャンに当たったお客様は、一度とエステティックを受けたと思わない。私は沢山勉強したエステティシャンが増えれば、業界ももっと発展すると思います。

千野 エステティシャン資格制度にも取り組んでいらっしゃいますね。

エステティシャン資格制度 確立に向けて

千野 エステティシャン資格制度にも取り組んでいらっしゃいますね。

下村 300時間研修を受けた人に業界団体で統一認定を与えようという動きがあります。今まではまったく統一した資格がなかったですから、300時間でも大きな進歩です。でも私は、まだ充分とは言えません。美容師は2年間、鍼灸師は3年間の勉強が必要です。エステティシャンは顔も体も触るのに、3カ月程度の勉強では少ないのではないのでしょうか。技術への自信も持たせたいし、仕事に誇りを持つことも難しいでしょう。連携した制度作りが難しいのも事実ですが、ここで立ち止まらず、さらに前進していかないと。

千野 東京大学とエステティックの理論研究も進めています。

下村 東京大学大学院医学系研究科で5年間の寄付講座「アドバンス・スキンケア・スバリ講座」を講義しています。お客様1000人に参加して頂き、体の変化や、脂肪数値、血液成分などのデータから「トリプルパーン瘦身法」の効果検証を行っています。昔からエステティックは効果があるのかわからないのか、ゾーンにありました。でも、お客様が健康診断の結果表を持ってきて、すごく良くなったと喜んでくれるのが沢山あります。そこで、大学や研究機関にサロンで行っている技術の検証をしてみたいと思ったのです。検証は順調に進み半信半疑だった先生方も驚いています。秋には学会で結果を発表します。当社は今後もエビデンスベースの技術・商品開発を行っていきます。

千野 今年からいよいよ海外展開を始めますか。

下村 香港で、5月8日に女性向けのエステティックサロン「ミスバリエステティックセンター」を、続いて6月に男性向けの「ワンダーハウス」をオープンします。さらに来年1月にマカオで「和スパ」というリラクゼーションスパをオープンします。

千野 日本のスパといふことですか。

下村 そうです。当社のスパゲストハウス技術に、お酒や米ぬか、お茶など日本独自の美容素材を加えたスパです。また、あまり知られていないですが、日本にはとても高品質なアロマオイルもあります。そういった日本の良いもの、日本が世界に売りたいものを持つていきます。この4、5年は世界中がスパブームでした。しかし悔しいのは、スパで成功したのはタイ式とインドネシア・バリ式だけということです。世界中のホテルにタイ式・バリ式のスパが整備され、日本人も夢中ですが、日本はそれだけでいいのでしょうか。

千野 日本は世界一の長寿国で、日本女性は世界で一番目に美しいと言われています。長寿の秘訣も美しい秘訣も、日本にあるのです。さらに、禅や華道、茶道といった癒しの文化

もあふれています。これらを全てあわせたら世界ナンバーワンの日本式スパができるはず。日本には車や家電製品以外に、もっと世界に誇れることがある。和の文化を根底にしたスパを世界に広げれば世界が平和になると、とんでもないことを考えているのです。

千野 他の地域への進出も考えていますか。

下村 ハワイとニューヨークにも現地法人を設立し、開店準備を進めています。中国本土や韓国、シンガポールでも検討中です。われわれのエステティックスクールには韓国やロシア、台湾、中国などからの留学生がとて多いのです。海外に進出する際は、彼らが集まり協力してくれたいです。

千野 もう何年も前から種はまいてあったのですか。ちなみに世界1位の美人国はどこですか。

下村 韓国ですね。韓国人女性は美容に力ける情熱がすごいです。韓国を含め、男性が強い国はとも女性が良い。男性が頼りないと、女性は手抜きをしまします。

千野 日本男児として憧れたらいいですね。人材育成も軌道に乗って、海外展開も始まる。次の夢は何ですか。

下村 世界1を受けたいエステティックセンターです。世界中に和スパを受けた人を増やして、観光客をどんどん日本に呼びたいですね。海外の人たちがスパやエステティックを学びに日本に来たいと思えるようにしたい。大きな夢ですが、できそうな気がするのです。業界のすばらしい先生方もいますし、色々な人に協力してもらいながら進めたいと思います。また、エステティックとエステティシャンの地位向上にも全力で取り組まれます。エステティックは、本当に良い仕事だと思っています。エステティシャンは一生懸命で、お客様も幸せそう。こんな素晴らしい仕事はありません。でもこの業界には不祥事や事故も多々、そのたびに働いている彼らが悲しむ。彼らの努力を世の中に認めてもらうために努力し、誇りを持って楽しく働けるようにしたいですね。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。

千野 ありがとうございます。



日刊工業新聞社 社長 千野 俊猛



千野 俊猛氏(左)と下村朱美氏(右)